

梅娘の短編小説「僑民」をめぐって

岸 陽 子

一、はじめに

一九九四年一〇月、中國和平出版社から『淪陷時期北京文學八年』が出版された。著者の張泉は序文に「ほぼ半世紀近くの風雪を経て、今ようやくあの異常な時代を客觀的に捉えるために必要な距離をとることができるようになった。歴史といわゆる〈歴史問題〉もすでに當事者と利害關係を持つことはなくなった。そこでやっとこの書名のような研究が可能となり、このような成果を生むことができたのである。」と述べている。

翌年二月には上海人民出版社から陳青生による『抗戰時期の上海文學』、七月には福建教育出版社から徐邁翔・黃萬華による『中國抗戰時期淪陷區文學史』が公刊され、抗日戰爭期

の複雑に錯綜した歴史的状況のもとでの淪陷區文學の全貌が明らかにされていく。

また、一九九六年には瀋陽で『東北現代文學體系』全四卷が刊行され、その中には日本の厳しい彈壓によつて東北を追われ、中國の各地を流轉しながら故郷の民衆の悲惨な現實を描き續けた蕭軍、蕭紅、舒群ら、いわゆる「東北流亡作家群」の作品だけでなく、日本の支配下に留まった「滿洲國」の作家たちの作品もかなり收録されている。

いうまでもなく「滿洲國」は一九三一年の「滿州事變」のあと、中國の東北地方に日本がつくった傀儡國家である。中國では「偽國」と呼び、その一四年間を「東北淪陷期」とい

中國文學研究 第二十六期

う。新中國成立後、その一四年間の歴史はさまざまな角度から研究がなされてきたが、文學に關する本格的研究が始まるのは八〇年代に入ってからである。それまでの中國現代文學史には一切言及されなかった「滿洲國」の中國文學をどう位置づけるか、あるいは日本と深く関わった個々の作家たちをどう評價するかをめぐって激しい論争も生まれ、こういった論争を経て、この時代の研究が深められていったのである。

やがて一九九九年には『中國淪陷區文學體系』全七卷（錢理群主編、廣西教育出版社）を刊行、「滿洲國」を含めて淪陷區の文學が、その苦澁に満ちた言葉で中國現代文學史の空白を埋めることになる。この畫期的なシリーズの錢理群による總序「言與不言之間」には、淪陷區の文學に對する新しい視點が提起されていて興味深い。

彼は、淪陷區の文學を研究する者は「わが身をその場に置いて考える」ことから始めなければならぬと説き、「滿洲國」の作歌季風の「言與不言」のつぎのような言葉を引く。

「人間は言うべきことがあれば必ず言わねばならぬ。言えることは必ず言わねばならぬ。しかし、言うべきことを言えないこともあるのだ。そのつらさは、無言の輩たちにはこれっぽっちもわかるまい。言うべきことを言おう

とする他人の言葉をおさえつけるならそれは惡漢である。他人が言えない言葉をどうしても言わせようとするならそれは大馬鹿者である。それゆえ、言を發する者にはそれなりの道理があり、言を發さぬ者にも不言でいることの苦衷というものがあるのだ。もしも言を發して道理なく、不言にして苦衷なければ、それら言葉を失つたも同然の人類に對しては、オシと名づけても不當であるまい。」

そして、「特殊な環境のもとに置かれた作家たちは、自分が語りたいのに語れない言葉は何か、他人（權力）が語らせようとすると語りたくない言葉は何か、自分が語りたい、そして語れる言葉は何か、それをどのように語るか、ということをやより具體的に考えなければならなかった」とのべる。

「政治（愛國抗日）は語らないが花鳥風月も語らない」というのが淪陷區の作家たちのぎりぎりの選擇であつた。彼らは日本の支配下というやむをえざる状況の中で、時代の中心テーマ（愛國抗日）から（日常生活）や（普遍的人間性）といったものにみずからの文學の主題を移さざるをえなかつた。しかし、そこではからずも（理想主義）と（英雄主義）というロマンティズムに彩られた時代の主流意識を離れて、これ

まで忘れられていた〈日常性〉と〈恒常性〉に目を向けることになる。彼らの屈折した筆は、錯綜し矛盾に満ちた現實を生活のデイトールとして描き出し、あの時代を生きた人々の複雑な精神世界をより深く捉えているというのである。

今も北京に健在の東北出身の女性作家梅娘の小説がさまざまな形で復刊されているのもこういった視點からの読み直しが進んでいるからであろう。

梅娘は、「自分が語りたい、そして語れる言葉」で精いつぱい語った。當時の彼女の作品は、ジェンダー・イデオロギーにはつきりと異議申し立てをしていること、〈母性〉に鋭いメスを入れたこと、さらに文化裝置としてのセクシュアリティの凝視など、人間存在の根源にかかわる重要な問いかけが含まれており、今日なお新しさを失っていない。

しかし、作品集『魚』が第一回大東亞文學賞副賞、中編小説『蟹』が第二回大東亞文學賞を受賞し、また夫の劉龍光が對日協力者として活躍したため新中國成立後は苦難の人生を歩むことになる。さまざまな辛酸を経て再び彼女が「梅娘」という筆名でペンをとるのは一九八七年一月、「寫在『魚』原版重印之時」を『東北文學研究史料』第五輯（ハルビン）に書いたときであった。それまでにも一九七九年の中ごろから香

港の『大公報』などにエッセイを發表しているが、いずれも劉青娘という筆名が使われている。ちなみに梅娘の長女の名を劉青という。

現在は梅娘の當時の作品もほとんどが再刊され、先にのべたような視點からの再評價が進められているが、本稿ではこれまで論じられたことのない初期の短編小説「僑民」をとりあげてみたい。

「僑民」は梅娘が「滿洲國」の新進女性作家として活躍していた時代の作品で、一九四一年の『新滿洲』第三卷第六號に發表された。

一九三六年、一六歳で作品集『小姐集』（益知書店）を出版した早熟な少女は、やがて日本留學を経て一九四〇年に短編小説集『第二代』（益知書店）を出版し、「滿洲」文壇の注目を浴びる。日本留學中に知りあつて結婚した同じ東北出身の夫劉龍光が、一九三九年二月、日本の『華文大阪毎日』の記者として採用されたため、夫とともに再び來日、一九四二年歸國して北京に居を定めるが、その間、一九三九年下半年から一九四一年七月まで一時歸國して北京に滞在している。

「僑民」は末尾に三月二十一日と脱稿の日が記されているので正確には北京で書かれた作品というべきであるが、主人公

は日本で職を得て細々と暮す「異國」の娘、小さなドラマの舞臺も阪急電鐵の中という設定で、日本滞在中に構想されたといつてよいだろう。

このころは梅娘の創作活動がもつとも活潑な時期で、「水族系小説」⁽⁶⁾と呼ばれている三つの小説「蚌」、「魚」、「蟹」を書いている。のちに第二回「大東亞文學賞」を受賞した「蟹」は、一人の少女の眼を通して、ロシアとの交易で財を成した東北の大家族が、日本の支配による經濟構造の變動と財産をめぐる家族の醜い葛藤の中で崩壊していくすがたを描いた長編小説で、梅娘の代表作といえるが、これも四一年四月脱稿ということ⁽⁷⁾で、「僑民」とほとんど同じ時期に書かれている。

「僑民」は、日本で暮している「滿洲國」の中國人と思われる娘が、電車の中で袖すりあつた朝鮮人の夫婦によって、意識の深層に閉じこめてある模糊とした鬱屈の由來を手繰り寄せることになる物語である。作者にとつて、「しばらくは安心して奴隸でいられる」存在に安住する「僑民」はおのれ自身の姿でもありうる。また、おどおどと夫の顔色を伺う哀れな妻も、おのれ自身の姿でもありうるのだ。

主人公の胸を押しつぶすのは重く垂れこめた空ではなく、アインデンティティを喪失した生の鬱屈なのである。

私はこの短い作品の中に淪陷區の女性作家として「滿洲國」及び日本占領下の北京で小説を書き續けた梅娘のすべての作品を読み解く鍵があるのではないかと考える。

この作品は、一九九八年六月にカナダで出版された『尋找梅娘』（明鏡出版社）と題する單行本に再録されているが、別の作品と言つていいほど大幅に手が加えられている。

ここでは、改作の問題をも含めて、「植民地と文學」、あるいは「ジェンダー」という視點から「僑民」を論じてみたい。

二、梅娘について

本名は孫嘉瑞（もとは孫加瑞⁽⁸⁾）。一九二〇年ウラジオストツクで生まれ、長春で育つ。父孫志遠は山東省招遠縣の貧農の息子で、その父に連れられて幼いころ東北に移住した。彼は十二歳のころからイギリス系商社の使い走りをして英語を覚え、さらにロシアと日本の銀行に勤めてロシア語と日本語を學んだ。やがて中華民國政府の吉長鎮守使にその才能を見込まれて娘婿となる。強力な後ろ盾を得た父は、鐵道・木材・食糧などの事業に商才を發揮し、長春でも屈指の實業家としてその名を知られるようになった。梅娘の自傳によれば、父が中東鐵道の貨物輸送主任をしていたころ、仕事でたびたび

ウラジオストックに駐在して梅娘の母と知り合い、愛し合うようになったという。

父はすでに親の選んだ農民の娘と事實上の結婚をしていたようで、梅娘にはわずかに二ヶ月年上の兄がいる。自傳には、梅娘の母と知り合ったときには、父はすでに鎮守使の娘と結婚していて、夫婦仲が悪かったとされているが、二ヶ月年上の兄を生んだ農家の娘は正式の妻ではなかったのだろうか。いずれにせよ、梅娘は正妻の子ではなかった。父は、張作霖の計畫した鐵道敷設に専念するため中東鐵道を辭し、母と梅娘を長春につれて歸る。自傳によれば、生母は正妻と同じ家に住んでいて、父の留守に正妻に追い出され、自殺したという。梅娘には生母の記憶がなく、なんとなく繼母が生みの親ではないことに氣づいており、自分の出生の謎に悩んだとされているが、はたしてそうであろうか。後述するように、かつて十七歳の梅娘が書いた隨筆「煤油燈」の母の思い出は哀切きわまりなく、まったくのフィクションとは思えない。「梅娘」というペンネームが「没娘」(母のない子)の寓意であることはよく知られているが、そこには自分をかわいがってくれた「偉大なる父」への精いっぱい抗議が込められているのではないだろうか。

梅娘の短編小説「僑民」をめぐって(岸)

繼母との軋轢をはらみながらも、梅娘は大實業家の娘として育つ。名門の吉林省立女子中學校に入學してまもなく、「滿洲事變」が勃發する。やがて「滿洲國」が成立。父が日本支配下の「滿洲國」でどのような立場にあったのか、梅娘の自傳には、あちこちにある會社を整理して、四平街の德昌實業公司だけを残したということだけしか記されておらず、詳細は不明であるが、繼母が結核にかかり、その療養のため、家族をつれて大連・青島・濟南などを轉々としたようである。

その後、一家は四平街に居を定めたが、梅娘を憎んだ繼母が死去。父は二ヶ月年上の兄を生んだ女性を范家屯から呼び寄せ、あらためて正妻として披露する。そして四平街に世界紅卍會四平分會を設立、慈善事業に専念したという。

やがて梅娘は吉林省立女子中學に復學するが、一九三六年、高級中學卒業を目前に父が死去、そのまま家に戻る。この年、十六歳で『小姐集』を益智書店から出版し、早熟な少女は作家としての第一歩を踏み出す。

父の死後、一九三七年、兄・弟・妹とともに東京に留學、自傳には女子大學の家政學部に入學したと記されているが、この女子大學が不明である。

そのころ、神田の内山書店で、魯迅をはじめ五四運動以後

の新しい中國文學を購入し、耽讀した。⁽¹⁾盧溝橋事件の砲聲と中國の置かれた狀況が彼女を不安にしたが、そうしたなか、内山書店でアルバイトをしていた専修大學の留學生劉龍光と知り合い、愛し合うようになる。だが、弟が病氣になり、梅娘は弟を連れて歸國、そのまま日本に戻れなくなってしまった。いくつもの縁談を斷り続け、どうやって一人で生活していけばよいのか途方にくれていた矢先、吉林省立中學の副校長から、「滿洲國」の新聞『大同報』の校正および週一回の婦人欄の編集の仕事を紹介される。

やがて梅娘は家中の反對を押し切つて劉龍光と結婚し、一九三八年末、『華文大阪毎日』の記者に採用された夫とともに再び來日、阪急沿線夙川驛近くに住んだ。「神戸女子義塾の家政學部」に籍を置いたともいうが、現在のどの大學かは不明である。

一九四〇年、前著と同じく益智書店から短編小説集『第二代』を出版し、「荒々しくも、文士が用いる勇氣のない言葉を用い、大膽にも、文士が取りあげる勇氣のない題材を取りあげ、すでに定評のある達意の筆で、一群の浮遊する屍のような男女と、一群の浮浪兒たちを描きあげた⁽²⁾」と絶賛され、本格的に作家としての道を歩むことになる。一九三九年から一

九四一年、一時北京へ戻った時期に書かれた三篇の作品『蚌』『魚』『蟹』は、いずれも作者の痛切な體驗に基づいたジェンダー・イデオロギーに對する異議申し立てを主題としており、今日なお新しさを失っていない。また、彼女の作品には、「滿洲國」建設による經濟構造の變化が大家族の崩壊を促す外的要因となつた一方、植民地化による「近代化」ではあつても、タイピストや電話交換手、速記者など、女性たちの職場が生まれることで、娘たちが封建的な家から脱出する可能性ももたらされる、といった植民地の複雑な狀況が描かれていて、「滿洲國」研究の難しさを思い知らされる。

その後、夫の劉龍光は、少なくとも表向きは最も日本に協力的な文學者として日本占領下の北京で華北作家協會の實務の責任者となり、大東亞文學者大會の組織者としても活躍する⁽³⁾。梅娘も第三回大東亞文學者大會に出席、『蟹』が大東亞文學賞を受賞する。これらの日本とのかわりが、新中國成立後、梅娘に大きな災厄をもたらしたのである。

日本の敗戦によつて梅娘と劉龍光がどのような境遇に置かれたか、梅娘による斷片的な回想以外に確かなことは分らない⁽⁴⁾。劉龍光は家族とともに臺灣へ渡つた後、家族を置いてまた大陸に戻り、何か地下工作をしていたようであるが、上

海から臺灣へ渡る船が事故で沈没し死去した。最愛の夫を亡くした梅娘は、身重の身で二人の子を連れて臺灣から新中國に戻り、一九五一年末、國務院農業部所屬の中國農業電影製作所に配屬される。しかし、一九五五年の「反革命分子肅正運動」から一九七八年の名譽回復まで、「文革」を経て二人の子を失い、あらゆる辛酸をなめた。一九八六年、東北淪陷區の女性作家の作品を復刻した『長夜螢火』（山丁編、春風文藝出版社）が出版され、當時の梅娘の作品も再録、ようやく中國の文學史に正統な地位を與えられたのである。

現在も梅娘は白頤路の中國農業大學（舊農業科學院）の宿舍に一人で住み、衰えることのない筆力でエッセーを書き續けている。

三、「僑民」の一つの読み方

僑民「は「異邦の人」とでも譯せようか。具體的には今日「在日朝鮮人」といわれる人たちを指していると思われる。日本で速記者（中國語？）の職を得て細々と暮している主人公「私」は「滿洲國」からやってきた中國人の娘だろうか。ここではつぎのような文脈の中で「異國」の人間であることが提示されているだけである。

梅娘の短編小説「僑民」をめぐって（岸）

「重く垂れこめた曇り空の下を（阪急電鐵の）電車は超スピードで走り續ける……窓からはところどころに水を引きいた水田が見える。清らかな水はどんよりと曇った空の下で不思議な光を放っていた。その光は海を思わせる。だがこんな日の海は暗い。暗い海に碎ける白い波しぶき。波も輝いてはおらず絲が切れてばらまかれた眞珠のように鈍色に光っているにちがいない。早く海を見に行きたい。海でははだしになって濕った砂浜を駆けぬけよう。風に吹かれて、髪の毛いっぱい海の風をはらませよう。潮の香りのする海の風を。曇り空、こんな曇った日の早春の海に來る人なんかいるはずはない。獨りで潮騒を聴こう。あの雄壯な大自然の音楽を。雨が降ってきたらあの邊の海岸を管理しているおじいさんの小屋で雨宿りさせてもらえばいい。あの人はこれまで一度だつて私が異國の人間だからといって差別したことはない。その小屋の小さな火鉢と少しへりのすり切れた粗末なたたみを思うと疾走している電車が遅く感じられてならなかった。私は外の景色から視線を戻し、顔をおおっていた新聞を持ち直した。一眠りしようか、いや、泣きたい氣持だ。なんと寂しい黄昏の海邊。」（傍線筆者）

讀者は「私」の胸を押しつぶそうとするのは「重く垂れこめた曇り空」だけではないことを漠然と感じ取るにちがいない。突然「私」のうしろにやってきた背の高い赤ら顔の男が自分の席から二つほど離れた席に座っている白い朝鮮服の女に私のわからない言葉でなにかを言いつけると、女はおずおずと立ち上がって「私」に席を譲る。なぜ譲ってくれるのか？

「私が女だからだろうか。そうかもしれない。私のまわりにはほかに女性がいらないから。電車に乗り込んだときはきらびやかに粧った娘が二人、私と同じところに立っていたが、やがて彼女たちは白いハンカチで口をおさえて車輛のもう一方の端にいる着飾った一群の人たちの方に移ってしまった。」（傍線筆者）

ここでも作者はさり氣ない口調であの時代の一つのありふれた光景を切り取ってみせる。ニンニクを多食する朝鮮人や「満人」に對する「臭い」という感覺的反應がそのまま人間の差別に短絡する「五族協和」⁽¹⁵⁾の虚妄性を衝いてみせるのだ。

「私」はこの朝鮮人の夫婦とおぼしき男女を観察する。

古びたオーバーを着た男は、安っぽい霜降りのズボンの下に當時の日本ではなかなか手に入らなくなっていた皮靴を穿いていた。一か所修理の跡が見えるが丹念に磨いてある。襟

を板のようにのりづけしたワイシャツを窮屈そうに着ているが、その袖口は上着の袖より一寸ほども長い。この朝鮮人はきつと工事現場の人夫頭にちがいない。眞面目に働いて小錢を貯め、上司の信頼を得て親方に取り立てられたのだ。そこで郷里から妻を呼び寄せて上司のところへお禮に行くところかもしれない。なぜなら白いチヨゴリを着て正装した妻が穿いていたのは、もう日本では賣られていない朝鮮靴だった。

「私に席を譲ったのは、彼が政府機關で働く安サラーマンにすぎない私の素性を見透かしたからにちがいない。そう、彼には人夫の友人はもういらないのだ。彼は一つ上の階層に這い上がったのだから。彼らより偉くなり、彼らを取り締まることができるのだ。偉くなった人間は自分より身分の卑しい人間と交わるべきではない。かといって、もっと高い人たちと交わるのはまだ適わぬ。さきほど着飾った二人の娘に白い眼を向けられたばかりではないか。あの着飾った娘たちの衣服の生地は私のコートにくらべていくらかも高價なものではないが、彼女たちは所詮彼にとつては高嶺の花。それでコートを着古しても買ひ換える錢のない私を選んだにちがいない。」（傍線筆者）
いかにも應揚に、それなりの威嚴を演出しようとする男と、

たえずおどおどした眼で夫の顔色を伺う妻の不安氣な表情を観察していた私は、腕をまくって時計を見る。そしてそれをチラツと見た男が時計を持っていないのに氣付く。

「私は突然この時計を彼にやろうと思った。彼にびつたりだ。この丸くて大きい時計は女性の腕には似合わない。これまで同僚たちの小さくて精巧な女物の時計を見せびらかされるたびに自分の時計が恥ずかしくて何度涙を流したことがか。

彼にやれば人夫頭として完璧だ。もうその腕で勞働することもあるまい。彼が指揮棒を持って人夫を見廻るとき腕に時計が光っていれば彼の威光はますます高まろう。これをやれば今着ている洋服を苦心して安くで手に入れたときよりずっと喜び、興奮するにちがいない。……だが、彼に通り返りの私の贈り物の意味が解るだろうか、世渡りの智慧を身につけたばかりの彼に。彼はいま、ちよつとしたことが彼の遠い未來の夢の實現を妨むことをひたすら恐れている。かりに受け取ったとしても彼を妬む人たちの新たな噂さの種になるかもしれない。盗んだとか、拾って届けなかったとか、甚しきにいたっては路上で奪ったとか。このどれ一つをとつても彼の未來を

ぶち壊し、彼を不幸に陥れることになる。人を喜ばせるのは自分の喜びを求めるよりはるかに難しいことに氣付いた私の心は、幻想から窓の外のどんよりとした空の色に墜ちていった。」（傍線筆者）

ここにも幻想を借りて作者が自分の伝えたいメッセージをちりばめているのに讀者は氣付くであろう。「自分の語りたいことをどうやって語るか、梅娘は巧みに迂回しながらコロニアルな風景を描きあげていく。

やがて電車は神戸驛に到着、男は立ち上がると妻に網棚の上の風呂敷包みを降ろさせる。ゆるんだ結び目を結び直そうとする妻を、眉をしかめてなにやら怒鳴っていた男は、おびえていつまでもうまく結べないでいる妻の手から包みを取りあげるとまるで風呂敷に何か汚いものでもついているかのやうに全部開いて思いつきりはたき、中の箱を包み直す。「私」はその箱の熨斗に「御禮」と書いてあるのを目敏く見つける。大股で歩いていく彼の後を風呂敷包みをしつかりと抱いておどおどといっていく妻。ふいに「私」の胸にこの朝鮮人の男に對する烈しい憎しみがこみあげてくる。

妻に威張り散らしているこの男は、「御禮」を捧げる相手には限りなく卑屈であるにちがいない。

「私は記憶の中の棒を持った居丈高な人夫頭の姿を思い出した。ちょうど彼の後にいた私はあの板のように糊付けしたワイシャツの襟を引き裂いてやりたいと思った。」折からの雨に途方に暮れる男、まだタクシーに乗るほど裕福ではなさそうだ。「私」もそんなぜいたくができる身分ではない。だが「私」はこれみよがしにタクシーの順番を待つ人びとの列に並ぶ。そして彼が狼狽した表情で妻をつれて横町へ入っていくのを見定めてからこつそりとその列を脱け出す。

「冷たい雨に濡れながら、私はあの哀れな女性に代つて彼女の夫に報復してやったような気がした。しかし一方で、雨が彼女の大切な一張羅を臺無しにしてしまうのではないかと氣になった。願わくば、彼女の夫が六錢をけちらずに市電に乗ってくれますように。」

この作品は恐らく作者自身の痛切な體驗にもとづいているにちがいない。

「私」は子供じみた行爲で胸を晴らすしかない。男の狼狽した表情を確かめただけで自分の中にこみあげてきた烈しい憎しみを癒すしかなかったのだ。「私」が八つ裂きにしたかったのは、同じく「僑民」として生きる「私」自身がなくずしに自分に許してきた奴隷性にほかならない、という作者の痛

切な思いが行間から伝わってくる。

しかし、「ふいに私の胸に烈しい憎しみがこみあげてきた」と主人公に言わせるもう一つの發火點が實は作者の心の奥に埋めこまれていたといえないだろうか。

それは梅娘が自傳で敬愛してやまぬ人間として描きあげた父孫志遠に對するルサンチマンである。掌中の玉のように自分を可愛がつてくれた父は、一方では實母を弊履の如く棄てた男であつた。

「滿洲國」の新聞『大同報』に十七歳の頃の梅娘の隨筆「煤油燈」⁽¹⁶⁾が載っている。そこにはほの暗いランプの下で、父に棄てられた孤獨な母と過ごした夜の思い出と、たった一人で母の死を看取つた暴風雨の夜の記憶が母への限らない思慕とともに語られている。

また、それから二週間ほど後の『大同報』にも『憶』⁽¹⁷⁾という題で、多少作品としての虚構性を加えながらも同一の内容を扱つた文章が發表されている。作者の名は麗娘となつてゐるが、「梅娘」という筆名が「沒娘」の寓意であることを考えれば、この文章の作者にはふさわしくない。それで麗娘という筆名を用いたのである。

いずれにせよ一九三七年、十七歳の梅娘が書いたこの二篇

の文章は、彼女の傳記を補充するだけでなく、その文學を讀み解くために重要であると思われる。

「父はあのひとを娶つてからは彼女の部屋へ行つて寝るようになった。以來、母の部屋にはその瘦せ細つた影だけが生きながらえていた。ある日乳母が去つて、私は母の部屋へ呼び込まれた。

『もう大きくなったのだから乳母がいなくてもいいわね。母さんといっしょに寝ましょう。』

私の頭を撫でた母の聲は夜風のように弱々しく、ひっそりと庭先で鳴く秋の蟲の聲のようにもの哀しかった。母は私の八才にしては大きい體をしつかりと抱きしめた。顔を上げたとき、私はほんやりとしたランプの光の中で、母の眼に涙が光るのを見た。

『母さん！ 父さんはどうして母さんの部屋で寝ないの？』

母はその問いには答えず、私を着替えさせるとランプの芯を小さくした。」

こうして「私」は小學校を卒業するまで孤獨な母とともに過ごすが吉林の中學に進學することになる。「私」は自分がそばにいなくなってからの母の孤獨な日々を思いやる。しかし

梅娘の短編小説「僑民」をめぐって（岸）

待ち望んだ休暇が来る前に「私」は父から呼び戻される。母が倒れたのだ。

「結局また母につきそつてランプの下で幾夜かを過ごした。だがこのときの母は、もう私に勉強しなさいという氣力も、影繪を教える氣力もなく、ときどきうわごとのように私の名を呼ぶだけであつた。また、弱々しくときぎれとぎれに父への怨嗟を洩らした。こうして母は落莫たる生を終えたのである。嵐吹きすさぶ夏の夜、母の最期を看取つたのは私とランプだけであつた。」（傍線筆者）

この文章の二週間ほどあとに掲載されている『憶』にはつぎのように記されている。

「あのひとが來たことによつて母の地位は侵犯されてしまった。母は胸いっぱいの怨嗟を抱いて父のもとを離れ、遠い田舎へ去つてしまった。私だけが母の喜びであり希望であつたのに私は母になにをしてやつただろう。不肖と盡きることのない思慕の念以外になにをしてあげただろう。」

このところ故郷は水害と胡匪の渦の中に浸されている。父が母に心を配るはずはない。母一人どうやって過ごしているのだろう。そうだ、私が母を迎えに行こう。幾山

河越えて母を迎えに行こう。だが、おのれ自身が空き腹を抱えているというのにそんなことができようか、海よりも深く母を戀慕つていても……。」（傍線筆者）

このあとに幼いころの母との想い出が、「燈下」、「夜の歸宅」と、オムニバス式に語られるのであるが、ここにも作者の胸に刻まれた悲しい母のすがたが描き出されている。第三話の「惡夢」は、ランプの消えた部屋で母が死んでいる夢を見た話である。

「新聞でショッキングなニュースを見た。母の憂いに満ちた面影がまざまざと浮かび上がってくる。私の胸に呪詛と悲しみがこみあげてきた。」（傍線筆者）

これらの隨筆には、少なくとももの心ついてからの作者と母の具體的な生活の反映があり、母を棄てた父への憎しみが読み取れる。

だが、自傳の生母に關する記述はつぎのようになっている。

「叔母の話によれば私はウラジオストクで生まれた。父が中東鐵道の貨物輸送の責任者であつたころのことである。父は仕事の關係でしょっちゅうウラジオストクに駐在した。そこで母と知り合つたのである。

二人は愛し合うようになり、二年間同棲した。やがて

父は親友とともに、奉天から海龍、海龍から梅河口に通じる二本の鐵道、奉海線と海梅線の付設に奔走するようになった。これは張作霖が日本の南滿洲鐵道を制して、吉林の中心部に食料を輸送するための對抗策として打ち出したものであつた。この偉業に専念するため、父は中東鐵道の職を辭し、母と私を長春につれ歸つた。もともと父は母と私を四平街に住ませるつもりだつた。當時、内モンゴルに通じるこの邊陲の地はすでに交通の要路として發展の趨勢を示していた。

ちやうどこの四平街の母のために建てた家の内装をやつていたころ、父は鐵道付設のため、瀋陽、長春、吉林、梅河口を忙しく飛び回っていたが、そのすきに繼母が密かに陰險な方法を用いて母を追い出したのである。このことは、私たち家族の間では公然の祕密でありながら、繼母の前では誰一人口にする勇氣がなかっただけである。

繼母は使用人たちに私が彼女の實の娘であると言わせた。繼母はそうやつて私を騙し、自分をも騙そうとしたのである。私を騙したのは私に彼女を信頼させるためであり、そうすることによって父の有怨を得ようとしたのである。自分自身をも騙そうとしたのは、おそらく一種

の贖罪意識からであろう。人の噂で母がすでに自殺したことを知った繼母は、恨みを呑んで死んだ靈の祟りといった因果應報を信じていたので、ずっと怯え續けていた。

私は俗に言う「生まれながらにして不幸な運命を背負った人間」で、苦しみから逃れることはできないのだ。ひそかに氣付いていた生いたちの謎は、しばしば私を眠れないほど不安にした。私はいつそ自分がこの繼母の實の娘であつてほしいと願つたが、彼女から慈母の愛を感じ取つたことは一度もなかった。

だがあるとき、この幼い私を困惑させる難題に、繼母がみずからはつきりと解答を出してくれたのである。」

ある日梅娘は繼母の信心している泥塑の狐神の尻尾をうっかり踏んで壊してしまふ。怒り狂つた繼母は鞭を振りおろして折檻をする。その憎惡に満ちたまなざしに、幼いながらはつきりと自分が彼女の實の子ではないことを思い知らされたと梅娘は記す。

以上が梅娘の自傳にみる父、實母、繼母の關係である。

この傳記に關連する彼女自身の二つの文章を見較べたとき、つぎのような疑問が生まれる。

1. 父は梅娘の母と愛し合い、梅娘を生みながら、そのあ

とで有力者の娘を正妻に迎えたのだろうか。自傳によれば梅娘には繼母の生んだ弟と妹がいるという。とすればやはり梅娘の母がいながら繼母を娶つたということになるだろうか。さらに梅娘には父が最初に寵愛したと思われる農家の美しい娘の生んだわずか二ヶ月年上の兄がいるという。繼母はその女性を妾として父のそばに置くことも許さなかつたので、彼女は長春郊外の范家屯で祖母の世話をして暮らしていた。後に繼母が病死すると父は改めて彼女を正妻に迎えた」と記している。

2. 梅娘の母は繼母に追い出されて行方が知れず、どこかで自殺したのであるか。梅娘は本當に母の死に目に會えなかつたのだろうか。十七歳の少女の書いた母の想い出「煤油燈」には、母との生活の斷片がリアリティをもつて描かれており、母の死を見取る場面の哀切さは、むしろ自傳の方がフィクションではないかと疑わせる。

3. 父が母を捨てたのではないか。仄暗いランプの下で、いまわのきわの母が、とぎれとぎれにつぶやく父への怨嗟を幼い少女はどんな思ひで聴いただろうか。

4. 梅娘の母にはロシア人の血が混じつていたのだろうか。父の死後、偶然見つけたネーム入りのハンカチには、デートを約した母のロシア語のメモが數枚、大切そうに包まれてい

たと自傳に記されている。

以上のような問いの答えを得ることはむつかしいにちがいないし、その必要もない。ただ、私たちはこれら梅娘自身の文章の行間から、彼女の「偉大なる父」に對するルサンチマンを読み取ればよい。

むろん自傳にのべられている通り、父は聰明でかわいらしい娘をこのうえなく愛していたに相違ない。

梅娘もこの亂世を生き抜いてきた「偉大なる父」を誇らしく思い、愛していたにちがいない。しかし、哀れな母との關係において父は許せない存在に變換される。

「僑民」において、おどおどと夫の顔色を伺う哀れな妻にそれがれる作者の憐愍のまなざし、その妻のためになにかをしないではいられなかった「私」の子供じみた行爲……この作品の原點には作者のコロニアルな日常経験とともに、何かのきっかけで作者の心の深層から生々しく甦ってくる烈しい情念が存在することを指摘しておきたい。

この「コロニアルな日常経験」と「父に對するルサンチマン」こそ、梅娘のすべての作品を読み解く鍵になるのではないだろうか。

彼女の多くの作品にみられるジェンダー・イデオロギーへ

の懷疑は、單なる觀念ではなく、生母をめぐる痛切な體驗を通して深まっていたにちがいない。

あるいは、梅娘にとつては「植民地」という名の民族の凌辱よりも、「ジェンダー規範」というまことしやかな同胞の男たちの凌辱の方が、より切實で重い課題であつたと言えるのではないだろうか。

四、作品の改作をめぐる

「僑民」は一九九八年六月に明鏡出版社から出版された『尋找梅娘』（張泉主編）に再録されている。

しかし、ほとんど原形を留めないほど書きかえられてしまっている。作家が作品の完成度を高めるために手を加えることは當然許されることであろう。しかし、再録された「僑民」の改作の意圖は明らかに藝術的完成度を高めるためではない。

まず主人公の「私」が華族學校（學習院のことか？）の學生であるという設定に變えてしまい、私の悩みはこのまま學校に留まろうかどうかということに具體化される。

「スクールメイトたちは禮儀正しく私を遇してくれるが、私はどうしても彼女たちと親しくなれない。私は彼女たちに憐れまれたくない。ただ理解して欲しいのだ。私に

も懐しい故國がある。彼女たちが自分を育ててくれた土地を愛すると同じように愛する故國があるのだ。」朝鮮人の男が座を譲ってくれたのも、「私」が身につけていた華族學校の制服と手袋のためだと解説する。

「彼は私を日本の華族のお嬢様と勘違いしたにちがいない。私が千人針を縫ったときにまわりの人を驚嘆させたことも、私の身分を證明することになったようだ。

だが彼が敬意を払うのは、私にはなく、人類を統治する等級に對してなのである。私はそつと溜息をついた。彼に面と向かつて私もおまえと同じように臣屬の國から來たのだからおまえの厚意を受ける資格もないし、受けたくもないことを告げたい。私は彼をさげすんだ。彼の卑屈さをさげすんだ。骨の髄まで奴隸である男を輕蔑した。」

ここで梅娘のいう華族學校とは一九一八年に學習院から分離した女子學習院を指すものと思われるが、これは宮内省の管轄で、留學生は入れなかったはずである。

また主人公の設定が變わったため、「私」がこの朝鮮人の人夫頭に自分の武骨な時計をやりたいという衝動に驅られる場面の心理描寫も變わってくる。

梅娘の短編小説「僑民」をめぐって（岸）

「この時計は彼にこそふさわしい。彼がよじ登ろうとしている地位にぴったリだ。ここはひとつ華族になりすまして氣前のいいところを彼に見せてやったら面白いにちがいない。彼の小心翼翼としていながら弱いものには居丈高な態度が私の中に沈澱していた憤怒をかき立てる。こういった虎の威を借る狐の類に私や私の同胞はどれほど口惜しい思いをさせられたことか。私は思いっきり彼をいたぶってやりたかった。

だが彼に時計をやっても、怪しまれるのではないか。たとえば私には、彼が奪ったとか、騙し取ったとか、盗んだとか誹謗することもできるのだから。私がひとこと聲をあげさえすれば、どの罪狀一つとっても彼が苦心慘憺して築きつつある夢の實現はかなわなくなるのだ。見たところ十分に狡猾なこの男が私の思うつぽにはまるはずはない。私は自分のとつぴな考えに興醒めした。」

原作からは、ごくありふれた植民地的風景を、みずからの内なる風景として抱えこまざるをえない主人公の痛みが傳わってくるが、ここには、同じ「僑民」としての哀しみが感じられない。

この他にも改作の方には、この作品の主題を（愛國抗日）に

明確化するため、原作にはないエピソードが插入され、さまざまな小細工が施されている。それを列挙してみよう。

1. 電車のアナウンスの聲、土曜日の午後買物に出歩く人びとの落ち着いた表情、勤勞動員に驅り出された寶塚の少女たちの屈託のない顔。

「人々はとても戦いのさなかにある社會に生きているようには見えなかった。……彼らの兄や弟、息子や夫がさほど遠からぬところで戦っているというのに、時局は彼らになにももたらしていないかのように従容としていた。この民族の大きな包容力は私を震撼させ、驚嘆させた。」

2. 電車の中で一人の子供をおぶった若い母親が千人針を頼みに来る。

「私は躊躇した。引き受けるべきか否かとつさに決めかねた。彼女は私を同胞の一人だと思つて頼んだにちがいない。私は不思議そうに電車の吊革が揺れるのを追つてゐる赤ん坊の眼をみて引き受けることにした。平和は誰にとつても大切だ。特に未來に生きる子どもたちにとつては。」

3. 原作では「私」が異国の人間だからといつて差別しな

いのは海岸を管理する老人であつたが、こちらでは第一次世界大戦に参加した老兵で、戦争で家族を失い、埠頭の倉庫番をしている反戦主義者ということになっている。

「私たちは平和への渴望を語り合つた。彼はいつも私に美しい童話を語つてくれた。浦島太郎が龜に乗つて龍宮城に行つた話、鶴が自分の羽で機を織り、命を救つてくれた木樵に恩返しをする話等々。これらすべての物語には一つの輝かしい信念がちりばめられている。平和があればこそすべての美しいものが存在するという信念が。これこそ私と私の友人のあこがれであり、そんな物語を聴くために私は彼に會いに行くのだ——あの第一次大戦のときの老兵に。」

原作に較べるといかにも饒舌で、第一次世界大戦の生き残りという老人を含めてリアリティに缺ける。

さらに、原作の隨所に割り込んできた言葉にも抵抗を覺える。一例を挙げれば、彼女の前に現れた朝鮮人の男を描寫する箇所につきのような言葉が割り込んでくる。

「これは上層の社會に這い上がるうとして、民衆から『^{イヌ}狗』という尊稱を奉られた類の人間である。」

いずれにせよ今日の時點から書きなおされた「僑民」は、原

作のリアリティも、ぎりぎりのところで發された言葉の緊張感も、同じく「僑民」である作者の鬱屈した感情も失われ、ただの饒舌でしかない。明らかに改惡といふべきであろう。

梅娘の作品には日本におもねったものなど一篇もないといつてよい。どれひとつ書き直す必要などないのである。

複雑に錯走した状況の中で、梅娘は「自分の語りたいことは何か?」「今語れることは何か?」を賢く見定めて精いっぱい語った。それは〈愛國抗日〉よりいっそう深い人間存在そのもののへの凝視によって不滅の價値を獲ち得ているといえよう。(了)

註

- (1) 岸陽子『淪陷區』の文學(中國研究所編『中國年鑑』二〇〇〇年)参照。
- (2) 季瘋『雜感之感』(長春益智書店、一九四〇年)。
- (3) 『大眾』創刊號「發刊獻辭」(一九四一年一月)。
- (4) 一九一一年一〇月二六日生まれ。北京輔仁大學卒業後、奉天『盛京日報』社に就職。三六年四月、專修大學經濟學部卒業後、新京『大同日報』社に就職。三九年二月、日本の『華文大阪毎日』の編集者となる。梅娘と結婚して日本に二年間滞在した後、北京に居を定め、燕京影片公司副社長、『國民雜誌』主編、『武德報』社編集部長、華北作家協會幹事會幹事長などを歴任、日本の

梅娘の短編小説「僑民」をめぐる(岸)

敗戦まで最も日本に協力的な文學者として活躍した。日本の敗戦後は、中共の地下工作のため、家族を連れて臺灣へ渡り、單身大陸に戻って、再び臺灣へ渡ろうとするが、四九年一月、船が事故で沈没して死去したという。張泉氏が劉龍光について書いた文章(杉野要吉編『交争する中國文學と日本文學』所收「華北淪陷時期の劉龍光」)は、妻である梅娘からの聞き取りに基づいており、中共の地下黨員であつたということも、客觀的な資料がないため斷定はできない。ただ、私のインタビューに梅娘は夫が早稻田大學の學生であつたと答えたが、早稻田大學で學んだ形跡は一切ない。後に岡田英樹氏によって專修大學の留學生であつたことが明らかにされるが、劉龍光は妻に早稻田大學の學生だと身分を偽っていたのだらうか。それとも梅娘が故意に偽つたのだらうか。そのようなことを記憶違いするはずはないのだから。文學者としての劉龍光の研究は、植民地における日本文學との關係でも重要であらう。

- (5) 「新美人計」(香港『大公報』一九七九・六・一〇)。
- (6) 張泉「梅娘——她的史境和她的作品世界」(『尋找梅娘』所收、明鏡出版社、一九九八)。
- (7) 同上。
- (8) 釜谷修氏のインタビューに基づく。釜谷修「梅娘——その半生・覚え書」(『半醒半醉三日遊』所收)には梅娘自身の口から「嘉」は間違いで、孫家の何人かの兄弟姉妹はみな「加」の字を持つと説明されたと記されている。
- (9) 「我的青少年時期(一九二〇—一九三八)」(『作家』一九九

六・九。

(10) 一九一六年頃に山東省で成立した宗教的結社で、儒教・道教・佛教・イスラーム・キリスト教の教義を折衷し、慈善事業によつて勢力を擴大した。中華人民共和國成立後、禁止される。

(11) 魯迅、鄒韜奮、何其芳、朱光潛、郭沫若など。前掲自傳参照。

(12) 山丁「關於梅娘的制作」『華文大阪毎日』一九四〇・一一・一五。

(13) 劉龍光「文學報國」『中國文學』創刊號「發刊辭」、一九四三(三) 參照。

(14) 梅娘によれば、夫は劉仁の指令で蒙疆政權下の蒙古軍參謀長であつた烏古庭の「起義」を工作していたという。劉龍光が日本の敗戦後、中共の地下工作員として活動したという説明は、中蘭英助氏の「燕京八景」(『北京の貝殻』所收、筑摩書房、一九九五)が論據とされている。このことは私自身も梅娘からじかに聞いている。

(15) 「滿洲國」は建國に際し、「五族協和」による「王道樂土」という理想を掲げた。「五族」とは、「漢・滿・蒙」に「日・朝」を加えたものを言う。ただし、日本人は日本國籍のままで、「滿洲國籍」に入れなかった。辛亥革命の際、「五族共和」(漢・滿・蒙・回・藏)の方針が掲げられ、これが中國の國家構想とされてきたので、この表現を踏襲して「五族協和」と稱したものと思われる。

(16) 『大同報』(一九三七・一〇・九)。

(17) 『大同報』(一九三七・一〇・二二)。こちらは「麗娘」と署

名されている。この二篇のエッセーが『大同報』に掲載されているのを知つたのは、北京市社會科學院文學研究所所長張泉氏の「ご教示による」。